

大河津可動堰改築事業



信濃川の大河津分水路分派点には、信濃川側に大河津洗堰、分水路側に大河津可動堰が設置されています。

大河津洗堰（大正11年設置）は老朽化が進んだため、平成13年度に新洗堰の改築を完了しました。

大河津可動堰は、昭和6年の完成以来、70年以上を経過し、その間、越後平野の水利用・洪水防御に大きな役割を果たしてきましたが、施設の老朽化が著しく、堰柱基礎部の空洞化・堰上下流の河床低下が進行し、堰の安定性が低下したため、平成15年度より特定構造物改築事業として可動堰改築に着手し、これまで掘削工事を進めてきましたが、平成17年度から本体工事に着手し、おおむね10年を目処に完成をめざしています。

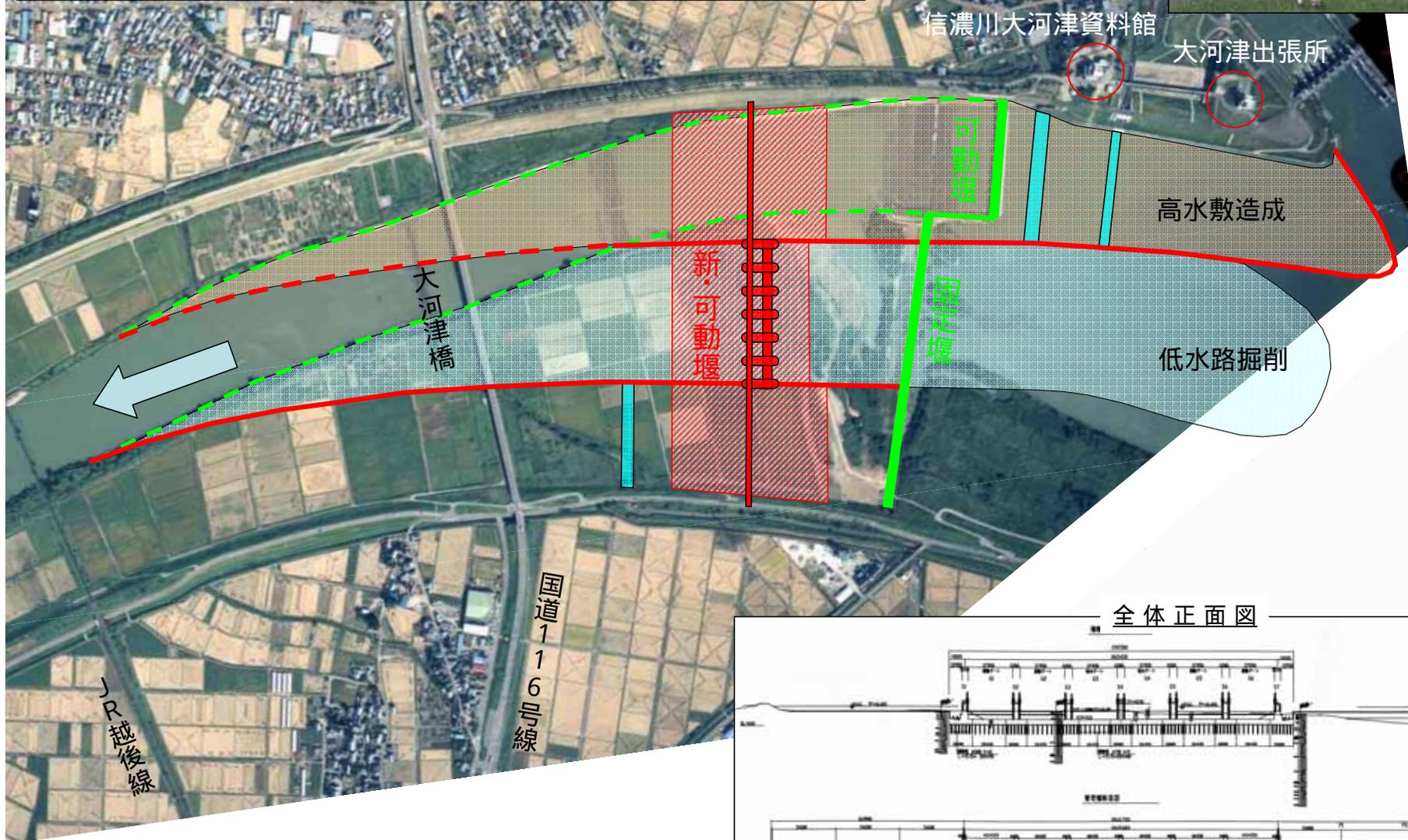
特定構造物改築事業とは・・・

すでに耐用年数に達している堰、水門等の大規模な老朽構造物及び河道計画に照らして著しく河積を阻害している橋梁、堰等の大規模構造物について全面的に大規模な改築が必要となった場合に、機動的、集中的な投資を行い必要な改築を行うことにより、その機能の回復を図る事を目的としています。

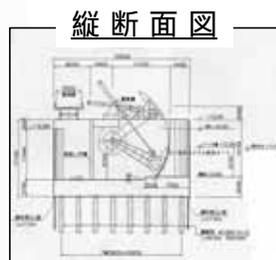
イメージパース（遠景：大河津出張所より）



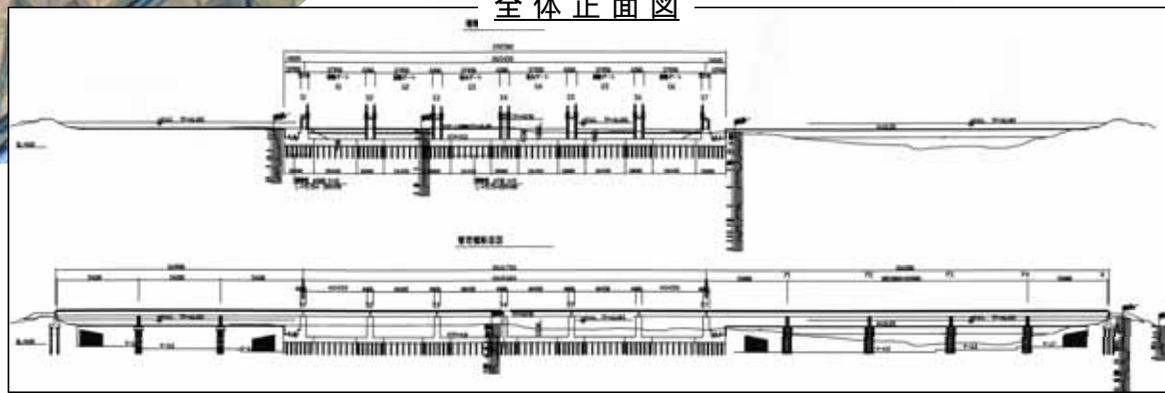
イメージパース（近景：右岸高水敷より）



凡 例	
	現在
	改築後

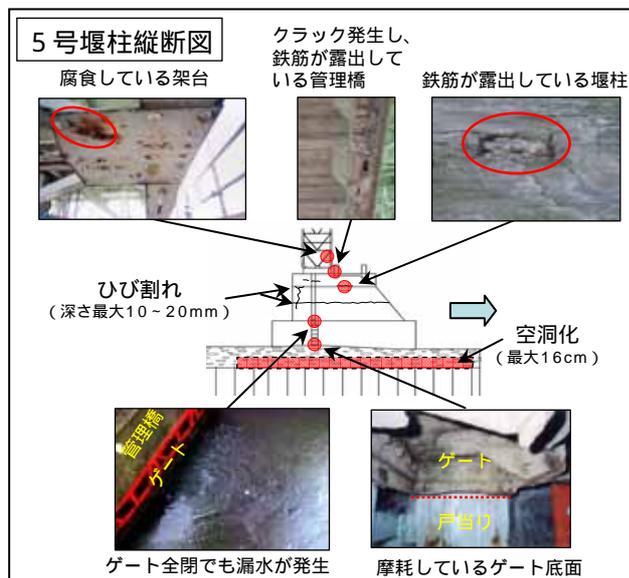


全体正面図



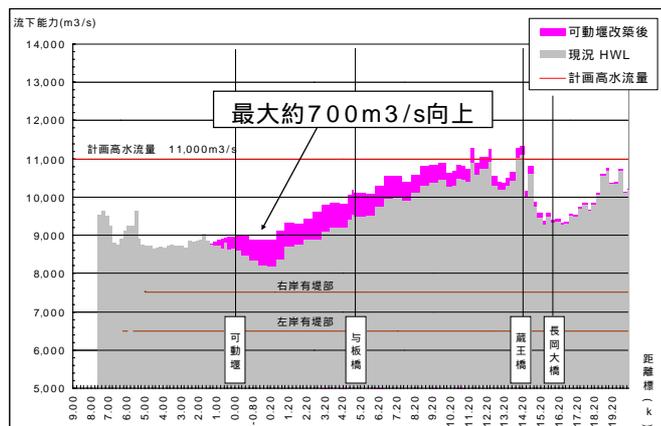
なぜ可動堰の改築が急がれるのか

1. 可動堰底部に連続した空洞が発生し、堰の安定性が低下
可動堰底部のほぼ全域にわたって空洞化を確認。(最大16cm)
2. 堰柱・管理橋の劣化、架台・ゲートの腐食が堰全体に進行
いたるところで劣化が進行しており、抜本的な改修が必要。
3. 洪水時には右岸堤防に水当たりが集中
可動堰直下流の右岸側は高水敷(河川敷)が無いので、洪水時には右岸堤防に直接洪水が当たる水衝部となり破堤の危険性が増している。
4. 小千谷地点より下流区間では、流下能力がもっとも小さい
可動堰地点の河床が高いため、流下能力がもっとも小さい地点となっている。



事業の効果

- ・可動堰の安全性が大幅に確保されます
(上記1・2.の解消)
- ・右岸水衝部が緩和されます
(上記3.の解消)
- ・可動堰地点の河床を下げる事により流下能力が向上します
(上記4.の解消)



事業を進めるにあたって

大河津可動堰改築事業の実施にあたり、学識経験者や専門技術者を中心とした各種委員会を設置し、景観、コスト縮減、新技術の活用等の検討を行っております。

信濃川河川事務所では、『可動堰情報館』<http://kadouzeki.jp>をインターネット上に開設し大河津可動堰改築事業に関する情報を発信しております。

国土交通省 北陸地方整備局 信濃川河川事務所
住所 〒940-0098 新潟県長岡市信濃1丁目5番30号
電話 0258-32-3020
ホームページアドレス
<http://www.hrr.mlit.go.jp/shinano/>